

ボランティア休職制度で青年海外協力隊に参加した輩の通の末岡直樹さん(第3)は入社九年目の九二年四月、派遣先のヨルダンに入った。

ヨルダンの国立大学で学生の成績管理や職員の住所録、仕事内容などを扱うデータベース

# サラリーマン

第473話

ースの構築を指導するのが仕事だ。午前九時に出勤、現地

プログラマーもどん挫してしまつた。「やり残した」とい

のエンジニアと一緒にデータベースの設計やソフトウェアの開発を進めた。

ヨルダンでのデータベース構築の指導は三代目で、末岡さんがいた二年前でほぼ完成した。だが一から開発を始め

たわけではないので、「自分の力をどこまで生かされたのか」といふ気持ちが残つた。

任期中、一緒に働いていた協力隊員が交通事故で亡くな

り、二人で進めようとしていた現地のエンジニアらに對する教育システム、「意識改革

現地ではエンジニアたちと何回もぶつかり合った。だが

## 任期終え強まる意欲

(5)

帰国する時の「ありがとろ」といふ感謝の言葉に、「やり残した」といふ思いがこみ上げてきた。

同僚の死は不幸な事故だったが、現地の人たちの優しさ

に触れた。現地のエンジニアたちは木で泣いて悲しんだ。最後のお別れがしたい

が、焼香までしてくれ

イフワイクにしたい」といふ意欲が固まった。

入社五年目のケニア山登山で目の当たりにした途上国の貧富問題。心を揺さぶられ、

「何かできれば」と考えて飛び出した国際協力だった。その経験から、「自分の生きがい」がはっきり分かつた。ボ

ランティア休職制度を利用したので会社を辞めず帰国したが、「まだやるべきことある」と思っている。

派遣当初、アラビヤ半島を学ぶためにホームステイした家族とは今でも交流がある。ステイ先の父親が「お前はうちの長男だ」と言ってくれるまでの仲になった。

仕事は不完全燃焼だったが、「どういふ人たちのために一緒に頑張りたい」といふ強い意欲が改めてわいてくる。

そして、「国際協力をラベて帰国、復職した。

の技術協力でなく、次は協力隊への参加のきっかけだったケニアで見えたような貧しい人々を助けたい。そんな思いを胸に九四年四月、任期を終

え、

て

て

て



生涯の友人ができた(ヨルダンで)